

第1節 新たなネットワークづくりの潮流のなかで

この街で暮らし続けていくために 老後を見据えたネットワークキング

いじょうぶ会

心ゆたかに美しく老いていきたい――。

横浜市内でも比較的新しい住宅地・港南台に、そんな気持ちをこめて生まれたのがいじょうぶ会だ。

会の言い出しっぺのひとり、62年度の「お世話係(会長をこう呼んでいる)」の田中恵美子さんは、こんな体験を持つ。

「もう5年ほど前になりますが、家の年寄りが寝込んでしまいましたね。私は、なるべくそばにいて面倒をみてあげたいと思って、そうしました。でも、そのために、家を一步も出られな。友人とのつきあいもできない。何だが、だんだん暗くなってきてしまっ……」

そのとき思ったのは、近所の友人のこと、そして私自身が年老いたことでした。同じことのくりかえしではだめだ、と……」

そのときになって、あわてても遅い。今から何か始めなくては――同じように考えている人が地域にいた。そして、この会がスタートした。昭和59年のことだ。

集まってきたのは、40代、50代の主婦である。

特に、広く会員募集をしたわけではない。自治会、老人会など、既存の組織とつながっているわけでもない。くちコミで、だんだんと増えてきて、現在20名。

「一人一人の個人的なつながりをまず大事にしよう、という姿勢でやっています」

と、田中さん。会のこんな広げ方も、やがて来る高齢社会をもに生きていける人の輪を地域につくっていくための、不可欠のステップなのかもしれない。

主な活動は、港南福祉ホームでのボランティア活動やバザーの手伝い、特別養護老人ホームの見学会やおむつ縫いのボランティアなど。ほかに、料理教室や介助についての講習会なども行ってきた。どれも、月に1回の月例会で話し合い、そのつど決めていく。また、月例会に出席できなかった会員のためと議事録がわりに、毎月会報を発行している。

「月例会の会場に、福祉ホームをお借りしてはじめてね。誰からともなく『話し合いのついでに手も動かしませんか』と、タオル人形やお

手づくりを始めたのがきっかけで港南福祉ホームのバザーのお手伝いも始まったんですよ」と田中さん。

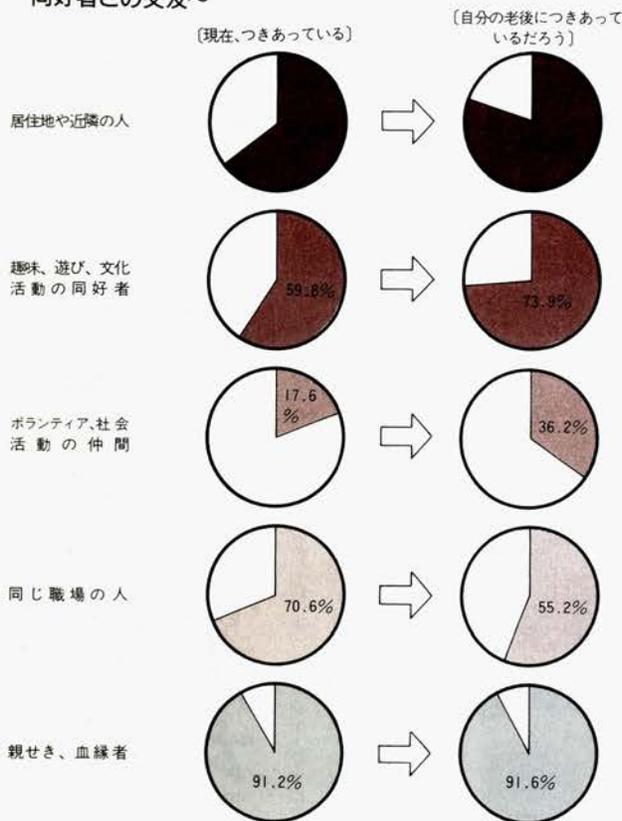
「最近、月例会の間、ある年寄りを預かって、話し合いをしながらみんなで世話しているん



港南福祉センターのバザーに出品する人形づくり

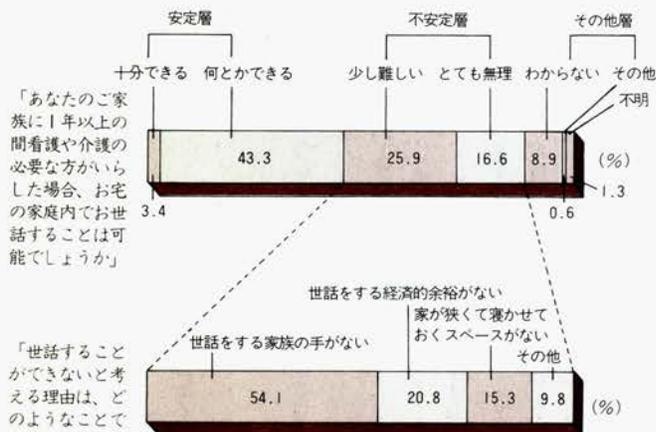
Network

■老後のつきあいはどう変わる？～強まる地域への志向、広まる同好者との交友～



横浜市「高齢化社会における住まい方調査」(昭和62年度)

■4割の市民は、家庭内での介護に不安



横浜市「福祉サービスに関する市民意識調査」(昭和61年度)

です。会員には、お年寄りの介助の経験のある人もいますし、そうでない人もいます。経験のない人も、この機会にお年寄りの世話について理解を深めています。お年寄りの家の人は、ほんの短い時間ですが、ひと息つくことができますし」

ボランティアといっても、こんなさりげない形でのかわり方もあるのだ。

いじょうぶ会の会員には、地域のサークルの役員やボランティアとしての活動経験をもっている人が多い。それぞれ、自分なりの意見をは

つきりもっているので、月例会の場ではそうとう激しい議論が交わされることも少なくないという。

「いろんなタイプの人がいることは、もちろんプラスにもなります。でも、まとめていくのが本当にたいへん。それでも、みんなと一緒に年をとるのだから、助けあい支えあっていることが前向きに考えると、きちんと意見をぶつけあうたうえて、一致点を見つけてという今の進め方が、きっと将来、生きてくると思っています」

現在進行形の活動を、老後という将来までを

見通して位置づけているのも、この街にずっと住み続けていくんだという気持ちがあっただろう。

「わたしの夢は、ひとつは夫たちが退職したらこの会にはいってもらいたいこと。もうひとつは、本当に夢みたいな話だけど、いっそ、みんなと一緒に住んだりおつかいかなんて、言ってるんですよ。お食事当番とかつくってね」

田中さんの言葉である。いや、夢ではないだろう。10年先、20年先に、いじょうぶ会のネットワークが何を生み出すか、楽しみだ。